

HISATO OSAWA

大澤壽人作曲作品錄音プロジェクト
BOSTON PARIS JAPAN / 駆けめぐるボストン・パリ・日本

ADMINISTRATION DE CONCERTS A. ET H. DANDIELOT

VENDREDI 8 NOVEMBRE 1935, A 21 HEURES
SALLE GAVEAU, 45-47, Rue La Boétie

CONCERT SYMPHONIQUE

FRANCO-JAPONAIS
sous le Haut Patronage de
S. Ex: M. NAOTAKE SATO, Ambassadeur du Japon en France
donné par le COMPOSITEUR
HISATO OZAWA



avec le concours de
Mme MARIA KURENKO
M. HENRI GIL-MARCHEX
et l'Orchestre de l'Association des Concerts Padeloup
dirigé par Hisato OZAWA

Prix 3 francs

1935年11月8日パリ
作品発表と指揮の演奏会プログラム
『交響曲第2番』『ピアノ協奏曲第2番』『桜に寄す』

大澤壽人作曲作品録音プロジェクト 「駆けめぐるボストン・パリ・日本」

生島 美紀子
(大澤資料プロジェクト代表、神戸女学院大学非常勤講師)

近年、大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906-53)の再評価が著しい。この作曲家が突然のように私達の前に現れたのは、2003年のオーケストラ・ニッポンニカの旗揚げ公演や、2004年にリリースされた《ピアノ協奏曲第3番 変イ長調 神風協奏曲》(1938年)《交響曲第3番 建国交響曲》(1937年)のCDによってだった。1930年代に作曲されたとは思えない作品の斬新さとダイナミズムは直ちに評判を呼び、文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞を受賞すると、大澤壽人という人物について、その背景が徐々に知られるようになった。

戦前はボストン・パリで、戦中戦後は日本で大活躍した作曲家であり指揮者であったこと。急逝後長らく忘れられていたが、藤本賢市氏と片山杜秀氏によって再び世に出たこと。そうして話題になる2006年、大澤家に保管されていた自筆譜を含む約3万点の遺品資料のすべてが、長男壽文氏より大澤がかつて教壇に立っていた神戸女学院に寄贈された。

その後は同学院において、大澤資料プロジェクトによって調査と研究が進み、2冊の作品目録が編纂された。殊に、2冊目の目録『煌きの軌跡Ⅱ—神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録』(2011年刊行)で明らかになった大澤の音楽活動の全貌は、まさに衝撃的であった。作曲活動だけでも、寄贈前には70数点と思われていた作品総数が実はその10倍以上。作曲・編曲合わせて1000近くという、見上げるばかりの業績を遺していたのである。指揮活動では、数え切れないとほどの演奏会とラジオ音楽会に出演し、これらの活動と並行して、神戸女学院で教育に従事していた。

このCDは、こうした超人的な活躍をした大澤の音楽に興味を持つ指揮者、岩村力氏の発案の下に、大澤資料プロジェクトによって企画され、一般財団法人 カワイサウンド技術・音楽振興財団の助成を受けて制作された。大澤の膨大な作品群の中で、実際に音で聴けるものは現在数点にすぎない。順時録音して、この天才作曲家の音楽の素晴らしさを広く知って頂こうというプロジェクトで、御子息大澤壽文・佐智子夫妻、御令嬢本庄徳子氏にご協力頂いた。

収録した13作品は、《ソナチネ》を除いてすべて世界初録音である。内容は、ボストン時代(1930年9月-34年9月)から8曲、パリ時代(1934年10月-36年1月)から1曲、帰朝演奏会(1936年)から3曲、及び戦後(1950年)の1曲である。岐阜サラマンカホールにおけるこの新録音を通して、大澤の煌く作品世界に是非触れて頂きたい。

加えて、2012年9月の芥川也寸志メモリアル オーケストラ・ニッポンカ「第22回演奏会」における《トランペット協奏曲》の音源を併せて収録させて頂いた。ニッポンカ関係諸氏のご厚意に感謝申し上げたい。

最後になるが、大澤の姓の「読み方」についてご質問をよく頂戴するので触れておきたい。

オオサワヒサト

戸籍に読み仮名はないが、1941年の「技藝者許可申請」に「大澤壽人」とふってあり、父の壽太郎氏のパスポートは「OSAWA」、長男の壽文氏も「オオサワ」姓を名乗っておられる。

問題になるのは、ボストンに留学する際の1930年に発行された大澤のパスポートで、アルファベット表記の箇所に「Ozawa」とZを用いている。以降、自署はすべてZで通した。

SからZへの変更理由を探ってパスポート以前を調査すると、関西学院中学部で外国人教師に接するようになった頃から時折Zが見られる。「外国人は清音Sを濁音Zで発音し、長母音と短母音の区別がない」という経験から、留学時には発音通りのZを用いたと思われる。そして、1936年の帰国時にそのZ表記が逆輸入される形で、「オオザワ」と発音する人が増えたのだろう。

その後も種々の資料にSとZが混在するが、晩年のラジオ放送におけるアナウンスや亡くなった時の追悼記事が「オオサワ」である。以上から、本CDでは「オオサワ=OSAWA」とした。詳しくは2014年刊行の『評伝』をご参照頂きたい。



大澤壽人略歴

- 1906年 8月1日大澤壽太郎・トミ夫妻の長男として神戸に生まれる。
幼い頃からピアノ・オルガン・歌唱等を学ぶ。
- 1920年 4月関西学院中学部入学、グリークラブに入部。
- 1926年 4月関西学院高等商業学部入学、オーケストラ部に入部。
在学中にルーチン、ヴィラヴェルディにピアノを師事、神戸オラトリオ協会を設立。
- 1930年 4月関西学院卒業。9月ボストン大学音楽学部に入学。
独学だった作曲の勉強を初步から始める。
- 1932年 9月ニューイングランド音楽院にも入学、コンヴァースに師事。
- 1933年 1月ボストン日本協会主催により第1回作品展開催。
6月ボストン大学卒業、同日ボストン・ポップス・オーケストラを指揮。
ボストン交響楽団を指揮した初の日本人となる。
- 1934年 5月ボストン日本協会主催により第2回作品展開催。
10月イギリス経由でパリ到着。
- 1935年 1月デュカ、ブーランジェのレッスン始まる。
11月コンセール・パドゥルー管弦楽団を指揮して作品発表の大演奏会開催。
パリで作曲家・指揮者として楽壇デビューした初の日本人となる。
- 1936年 2月帰国、5月東京・6月大阪で帰朝演奏会開催。
9月JOBKよりラジオ初放送、以後放送作品総数は130近く。

- 1937年 4月東京・12月大阪で「作曲指揮交響演奏会」開催。
神戸女学院の教壇に立つ。
- 1938年 6月大阪で演奏会《ピアノ協奏曲第3番 神風協奏曲》発表。
- 1939年 6月東京で「日本現代作曲家連盟第九回作品発表会」に《ソナチネ》を出品。
- 1940年 5月大阪で「紀元二千六百年奉頌演奏会」開催。12月奥田澄子と結婚。
- 1941年 12月壽文誕生。
- 1944年 6月映画音楽を作曲、以後映画作品総数は40近く。
- 1945年 5月徳子誕生。
- 1948年 4月神戸女学院大学教授就任。
- 1949年 12月大阪でヘンデル《メサイア》指揮。
- 1950年 9月JOBK「シンフォネットアワー」始まる。
- 1951年 4月シンフォネットアワー終了、5月JOBK「シルバータイム」始まる。
11月朝日放送(ABC)開局、準備段階から音楽面を担当する。
- 1952年 6月シルバータイム終了、9月「ABCホームソング」「ABCシンフォネットアワー」始まる。
10月朝日放送専属指揮者となる。
《大佛千二百年祝典譜》により民間放送連盟音楽賞受賞。
- 1953年 10月28日多忙を極める中、急逝。
作曲作品と共に膨大な編曲作品を遺す。

《小デッサン集》(1934年9月、ボストン)

『小デッサン集』は4年間のボストン時代の最後に書かれた作品で、パリを目指して北大西洋航路の定期客船に乗り込む前週、1934年9月初旬に完成した。大澤を支援したボストン大学音楽学部長のジョン・P・マーシャルに捧げられている。

ボストン留学期は大澤の天賦の才能が一挙に花咲いた時代だった。和声・対位法・楽式・楽器法など、西洋の伝統的な作曲手法を瞬く間に身につけ、調性衰退後の作曲界の動向を反映して無調作品の創作に挑み、一挙に前衛派に躍り出た。アメリカに亡命したアルノルト・シェーンベルクに間近に接し、ニコラス・スロニムスキーやロジャー・セッションズ等の「ウルトラ・モダン派」から刺激を受けて、独創性を追求しながら創作を続けていた。

ボストン最終年である1934年には、前年の『ピアノ協奏曲イ短調』から始まる交響大作群、「ボストン四部作」のうち、『三つの田園交響樂章』『コントラバス協奏曲』『交響曲第一番』を次々と完成。あふれる創作力はその傍らで、『ソナチネ ホ短調』や、無調による3つのピアノ組曲を生んでいた。

『小デッサン集』は、『バターンズ』『六つのカブリチェッティ』と共にそのピアノ組曲の1つであり、ごく短い5曲から成る。演奏時間は全体で約5分だが、調号を離れた創作上の転換点を示す重要な作品である。全く異なる5つの楽想が火花を散らすように展開され、大澤の才気がここぞと示されている。原題が『Les Petits Dessins』とフランス語で記されているのは、これから向かうフランスを意識したからであろう。

第1曲は17小節より成り、形式は第9小節を中心A1-A2が配置される。1オクターヴより半音広い、或いは狭い音程を核とする無機的な無調旋律と調的な和音が対照的に用いられる。

第2曲のみは調号が記され、右手が変ニ長調、左手がイ長調の複調である。A1-B-A2の小さな3部分形式であり、日本の律音階と4度の累積和音による旋律が聞こえてきて、民謡風な響きの中に日本と西洋の融合が試みられている。

第3曲は最小の作品で、各2小節のA1-A2で4小節を形成する。ポリリズムの可能性を探るエチュード風で、速いテンポの中に拍節感や拍子感を喪失させたおもしろさがある。

第4曲も各2小節のA1-B-A2で、ハ音のみの左手が4オクターヴに亘りながら2拍子と3拍子の間を揺れる。中音域で静かに歌う旋律は、断片的で浮遊感を漂わせる。

第5曲は4拍子を終始保持し、各9小節の3部分形式。変口を中心とする音高レベル調性、半音階、4度の累積和音、隣接半音のぶつかり、白鍵と黒鍵の対照等、無調における音高選択のあらゆ

る可能性が試みられ、「ジャズ風のアクセント」の指示が効いている。

尚、本作品は大澤自身が作成した作品表において「巴里室内学会にて演奏」と記されているので1935年に初演されたと思われるが、詳細については現在不明である。

《コントラバス協奏曲》より第2楽章〈モノローグ〉(1934年4月、ボストン)

大澤の才能がボストンで花開いた理由の一つに、ボストン交響楽団の定期演奏会に通い詰めたことが挙げられる。大澤が到着した1930年はボストン響設立50周年にあたり、各国トップレベルの作曲家に新作を委嘱し、その世界初演がセルゲイ・クーセヴィツキ指揮の下にシリーズとなって行われた。

翌1931年以降も、世界初演やアメリカ初演をはじめとして、発表されて数年以内の“現代音楽”をクーセヴィツキが取り上げる機会は多く、大澤にとっては20世紀前半の世界最前線の音楽に触れる絶好の勉強となった。

成果は、ボストン大学卒業の半年前の1932年12月辺りから始まった創作ラッシュに現れた。卒業作品として提出された《ピアノ協奏曲 イ短調》(1933年5月)から始まり、《三つの田園楽章》(1934年1月)《コントラバス協奏曲》《交響曲第一番》(同年4月)へと続く交響大作群、「ボストン四部作」が次々と生み出され、戦前の日本洋楽史に燐然とした輝きを放っている。

本作品は日本初の、また世界的にも数少ないコントラバスのための協奏曲で、5楽章から成る。第1楽章: アレグレット・モデラート、第2楽章: モノローグ、第3楽章: アリア、第4楽章: ダイアローグ、第5楽章: フィナーレ——以上のうち、この〈モノローグ〉は第2楽章である。元々コントラバス奏者だったクーセヴィツキに献呈され、大澤は作品完成の翌週にはボストン響の練習場に楽譜を持って彼を訪ねている。

さて、第2・第3楽章には、当時の最先端の作曲法である四分音が使用されている。四分音を用いた作品としては、《チェロソナタ》(1932年10月)《ピアノ五重奏曲》(1933年3月)があり、《コントラバス協奏曲》はそれらに次ぐ3作目にあたる。弦楽器の中でも大型のこの楽器に要求される四分音は演奏至難だが、技術的な困難を乗り越えると、大澤が発想した音楽の独創性が際立ってくる。雅楽の管楽器を思わせて始まる音楽が私達に想起させるのは、能の演者の抑制された動きや舞台上に張りつめた緊張感だろうか。西洋の様式の中に日本的な美が溶け込んだ見事な作品である。

尚、《コントラバス協奏曲》は創作以来、80年間まだ初演が行われていない。このCDが第2楽章

のみだが録音初演であり、大澤の異才に触ることのできる貴重な音源資料となる。演奏は1965年にドイツのペーター社から発売されたピアノ伴奏版に基づくが、1953年の大澤の急逝から没後8年を経過した時期に、誰の手によってピアノ伴奏に編曲され、どの様な経緯で出版に至ったか等は、現在不明である。

《桜に寄す》(1935年9月、パリ)

華やかな大澤のキャリアの中でも、ハイライトとなる出来事といえば、ボストンとパリに於ける自作自演演奏会が挙げられよう。ボストンでは、1933年6月12日のボストン大学卒業式の晩に、ボストン・シンフォニー・ホールに於いてボストン響メンバーから成るボストン・ポップス・オーケストラを指揮して自作の《小交響曲》を披露。ボストン響を指揮した初の日本人となった。

続くパリでは、1935年11月8日にサル・ガヴォーに於いてコンセール・パドゥルー管弦楽団を指揮して自作の《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番ト短調》《桜に寄す》を発表、ラモーからベルリオーズに至るフランス人作曲家の作品を指揮。パリで自作自演による演奏会を開催した初の日本人となった。

パリの会場にはジャック・イベール、アルチュール・オネゲル、ダリウス・ミヨー、アンリ・ビュッセル、アレクサンドル・チェレブニン、シャルル・ケックランなど20世紀前半の西洋音楽史に名を残すきら星のような作曲家達や、多数の音楽記者達が詰めかけ、作品発表と指揮の会は絶賛を博した。大澤はキャリアのピークを築いたのである。

《桜に寄す》はその煌く晩に初演された日本語の管弦楽伴奏歌曲で、私達に馴染みの《さくらさくら》が引用され、全体は大澤による“偏詩”となっている。初演独唱を務めたのはロシアのソプラノ、マリア・クレンコ。モスクワ音楽院卒業後、ボリショイ劇場等で主役を務め、ヨーロッパデビュー。1925年にアメリカに渡つてからはラジオにも出演し、既に名声を確立した歌手だった。このクレンコのために、大澤はローマ字で《桜に寄す》の歌詞を書き込み、当日は大人気を呼ぶ作品となった。

本録音は大澤自身が編曲したピアノ伴奏版である。オーケストラ練習に入る前に、自らピアノを弾いてクレンコと合わせるために用いた。冒頭の数小節で日本の春を感じさせるオーケストレーションの素晴らしさはピアノ伴奏版においても感じられ、歌唱部分の自在なメリスマ等、素朴な《さくらさくら》が流麗な芸術歌曲に見事に変身している。日本の心が華麗な衣装を身にまとったこの歌曲は、日本人歌手に世界の桧舞台で歌い継いでほしい名作である。

ああ、ふるさとの春の想いは
さくらさくら と歌うころ
弥生の空は 見渡すかぎり 霞みか雲か 匂いぞ出する
(ハミング)花に慕うとも いにしえのままに歌い
いざやいざや 見にゆかん

《ロンディーノ》(1936年10月、神戸)

帰国した1936年に、帰朝演奏会を東京と大阪で開いた大澤は、同様のペースで、毎年2回の作品発表会を続ける予定を立てた。翌1937年は「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」を4月に東京、12月に大阪で開いたが、1938になると、6月に大阪での「大澤壽人作曲指揮愛国交響大演奏会」を最後に、東京公演がみられなくなる。“愛国”的語が示すように時局の変動によって、音楽活動が妨げられてゆくのである。

日本語歌曲《ロンディーノ》は、1937年4月の日比谷公会堂に於ける東京公演で、大澤指揮新交響楽団、ソプラノ独唱長門美保によって初演された。

この会では歌曲の他に、《ヴァイオリン小協奏曲 支那詩》と《交響曲第三番 建國交響曲》を初演して、大澤は留学以来の変わらぬ旺盛な創作力を示した。1937年の時点で、既に交響曲を3番まで書いていた邦人作曲家は、20歳以上上の山田耕筰まで遡ってみても多くはない。

また、この時にはでは4度目の来日中だったフランス人ピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスが、プログラムにはないドビュッシー作品を飛び入りして演奏するなど、その豪華な賛助出演が話題になつた。ジル＝マルシェックスは、去る1935年11月にパリで大澤が《ピアノ協奏曲第2番 ト短調》を発表した際の初演者で、以来無二の友である。二人の親しい関係を日本の聴衆に披露したのである。この様に、37年4月の「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」は話題の多い演奏会となつた。

さて、《ロンディーノ》は大澤の管弦樂伴奏歌曲としては、1935年にパリで発表した《桜に寄す》、36年の帰朝演奏会で発表した《秋の歌》《友》《走馬燈》に次ぐ。《桜に寄す》がマリア・クレンコによって初演された以外は、大澤の管弦樂伴奏歌曲はすべて長門美保が初演している。

当日は、《秋の歌》再演、《鉄の祈り》初演、《ロンディーノ》初演、《桜に寄す》の順で演奏された。仏語・英語・日本語を並べたこれらの歌曲で、大澤はボストン・パリへの留学の成果を強調した。《秋

の歌》に対して、《ロンディーノ》と《桜に寄す》は発表する4月の「春」を意識したのであろう。やわらかな、春にふさわしい音楽である。尚、立居寛の詩は出典が現在不明のため、以下は音楽上のフレーズに拠る。

うたはいづみに めぐります
そよかぜに みどりの かげさせば
ほのかに をとめの ふえのねして
はる はる はると みづにうたふ

こころは あをぞらにさり
ふえのね くもとゆくしばし
いこふおもてに うきくさのかげさせば

うたはいづみに めぐります
そよかぜに みどりの かげさせば
ほのかに をとめの ふえのねして
はる はる はると みづにうたふ

みづにみどりのきえて
うたはかぜとさるころも
をとめののぞみはかわらず ふえのねさらず

うたはいづみに めぐります
こころ わかばに かげおへば
ほのかに をとめの ふえのねして
はる はる はると みづにうたふ

《走馬燈》(1936年春、神戸)

1936年2月22日、足かけ6年に亘るボストン・パリ留学から帰国した大澤は、早速に帰朝演奏会を東京と大阪で開催した。

東京では5月26日に、日本青年館に於ける「巴里新帰朝作曲指揮者 大澤壽人第一回演奏会」を開き、自ら新交響楽団(NHK交響楽団の前身)を指揮した。作曲家としても指揮者としても欧米で認められた成果を披露する会であった。プログラムは、パリで発表して大評判を呼んだ《交響曲第二番》と《ピアノ協奏曲第二番 ト短調》の日本初演、及び帰国直前の1935年12月にパリで完成した《路地よりの断章》の世界初演、及び自らパリで楽譜を買い求めたベルリオーズの《序曲「リア王」》の日本初演という、初演の交響作品ばかりを並べた意欲的なものだった。

続く大阪では6月23日に、大阪朝日会館に於ける「巴里新帰朝 大澤壽人作曲指揮交響音楽会」を開き、宝塚交響楽団を指揮した。この際には、ボストンで発表した自作《小交響曲 ニ長調》日本初演、《路地よりの断章》再演、ベルリオーズの《序曲「リア王」》、ラヴェルの《古風なメヌエット》の交響作品の他に、英語・仏語・日本語による4曲の管弦楽伴奏歌曲が含まれていた。

日本語歌曲《走馬燈》は、英語による《友 Comrades》、仏語の《秋の歌 Chanson d'automne》、日本語の《桜に寄す》と共に、その時発表された。帰国後の1936年3月から5月の間に作曲されたと推定され、歌詞は一柳信二(作曲家、一柳彗の父)の詩に基づいている。

チエリストの一柳は詩人でもあり、大澤にとっては関西学院の先輩で、まだ学生だった留学前に演奏会を共にしていた。その関係で一柳の詩を取り上げ、管弦楽がチエロ独奏を含んだのだろう。詩に関しては、大澤のために書き下ろされたか、或いは既に詩集で発表されていたか等、現在不明である。

尚、管弦楽伴奏原曲は自筆総譜が失われたため、本作品が聴けるのは大澤自身の編曲によるこのピアノ伴奏版のみとなる。

かぜにふかれて はしる あおいかけえ
なにのふきつか ならぶうま うま うま
なつのよいやみ ぼうれいのぎょうれつ

《ナイト・モノローグ》(1933年4月、ボストン)

1933年6月に大澤は、ボストン大学音楽学部4年間の課程を3年で終えて卒業。その直前の4月に、ヴァイオリンとピアノのための《ナイト・モノローグ》は書かれた。ホ短調のこの作品は、ボストン大学同級生でヴァイオリン専攻のロバート・コーベンからの委嘱作で、翌5月9日の学内リサイタルにおいて、コーベンのヴァイオリン、大澤のピアノによって初演された。

大澤はボストン大学卒業の頃には、学内ののみならず、学外で通用する“新進作曲家”として知られており、大学側も全米規模での作曲家会議へ出席しないかと提案するほどだった。コーベンはそうした同級生に、作品を書いてもらいたいと頼んだのである。

同時期に大澤の創作は卒業作品の《ピアノ協奏曲 イ短調》が完成に近づいていた。このジャンルで日本最初期の作品となる大作への意気込みに対して、同級生の依頼には楽しみながら取り組めたであろう。ボストン時代のヴァイオリンとピアノのための作品には、到着して間もなく書かれた《憂鬱な即興曲》(1930年11月)がある。《ナイト・モノローグ》と比較すれば、主題はどちらも民謡音階に基づく日本風旋律、形式も同じく3部分形式だが、前者が型にはまつたホモフォニー書法なのに対し、後者には様々に情景が織り込まれ、変拍子の“ヘミオラ”が生ずるなど、より複雑である。その書式の充実ぶりに、わずか2年5ヶ月の間に作曲の道を一挙に駆け上がった大澤の急成長がうかがわれる。

《富士山》(1933年2月、ボストン)

1933年2月に書かれたピアノ独奏曲《富士山》は、冒頭に「広重から着想を得たピアノ組曲」と英語で記されている。だが、組曲としては完成せず、この1曲のみとなった。

大澤が留学した当時のボストンでは、アジア美術の収集に熱心なボストン美術館を中心に、市民の間で東洋文化への関心が強く、個人コレクターも多かった。大澤も同美術館を初めて訪れた時には、「日本で見られない広重、歌麿、応挙」が展示してあると興奮気味に語っている。

《富士山》は低音域で漠と始まり、やがて鹿児島小原節の一節が聞こえてくる。その旋律が変容を重ねる背景に、オーケストラを想起させる広い音域が拡がって、ドビュッシーに通じる浮遊感が漂う。大澤が最も影響を受けたという、作曲家の一人である。最後に余韻を残しながら最々弱音で消えてゆく音楽は、大澤の美しい“小原節幻想”である。終盤で登場するグリッサンドは大澤が好み、大作《ピアノ協奏曲第3番 神風協奏曲》(1938年)へとつながる用法となった。

21世紀の私達と異なり、神戸からハワイまででも船で10日かかった戦前の時代に、大澤の様な留学生には「遙かに離れた母国」という思いがつきまとっていた。《富士山》には、大澤のそうした遙かな母国への憧憬があふれ、日本の感性が手堅い西洋式手法によって凝縮されている。

《ソナチネ ホ短調》(1933年5月、ボストン)

《ソナチネ ホ短調》は大澤のピアノ独奏曲の中で最も規模が大きく、ソナタと呼んでふさわしい内容を持つ。1933年5月に完成し、翌年の第2回作品展に於いてボストン大学同級生のアレグリン・ゲットによって初演された。その際の作品名は「ソナチネ第3番」となっているので、他にもソナチネが作曲されたと思われるが、現在はこれのみが遺っている。

《ソナチネ》は、ボストンからパリに渡った際には、ポール・デュカに見せて助言を仰ぎ、帰国後の1939年には会員となった日本作曲家連盟の「第9回作品発表会」に出品しているので、このジャンルにおける大澤の自信作であったのだろう。生前に出版された(龍吟社)数少ない作品の一つでもある。

さて、1933年5月にはこの《ソナチネ》の他に、《シンバル》《ウッドブロックス》というピアノ独奏曲が創作されているが、これらの作品の間には、創作上の重要な境界線が引かれる。即ち、《ソナチネ》にはホ短調の調号があり、他の2曲は調号がない無調作品である。とは言っても、《ソナチネ》の音楽の実態は既に無調に近い部分もあり、殊に第2楽章にその傾向が顕著である。

全体は3楽章構成で、順に「ソナタ形式・3部分形式・ロンド形式」であるのは、それまでに完成していた《ピアノ三重奏曲》(1932年)や《ピアノ五重奏曲》(1933年3月)や、並行して創作していた《ピアノ協奏曲》と同様である。

第1楽章「速く活気を持って」。ホ短調の第1主題とロ長調の第2主題が明確に提示される点など、古典的なソナタ形式を多々踏襲した楽章だが、拍子が煩雑に交替する“変拍子”や、広い音域のダイナミックな使用等、独創的な近代ソナタ形式の特色を備えている。

第2楽章「ややゆっくりとアダージョのように」。ト短調の調号は示されるが機能和声の進行をみせず、旋律も主音と属音を骨格とするのみで、無調との境界にある。冒頭2小節の主題が多様に装飾されてゆき、管弦楽大作を得意とした大澤の楽器への音色感が織り込まれている。この時27歳という実年齢をはるかに超えた、音楽的思索の深さを感じさせる楽章である。

第3楽章「速く生き生きと戯れるように」。ピアノの音域を広く使った和音と、弦や管楽器の独奏を

思われるメッセージが、A-B-A-C-Aの小ロンド形式のうちに交替する。同時期に日本最初期の《ピアノ協奏曲》を書き上げた大澤らしい、力感溢れる終楽章である。

《ノクターン》(ボストン)

ピアノ伴奏英語歌曲《ノクターン Nocturne》と《シャンティ Chanty》は、神戸女学院に於ける楽譜調査において偶然発見された。同じ五線紙に続けて書かれているため、同時期に作曲されたと思われるが、大澤の署名が記してある他は作曲年や詩についての記載が一切ない。書簡にも言及はないが、作風と英詩を用いている点、及び筆致からボストンで創作されたと推定される。

ボストン時代の大澤は、ピアノ伴奏英語歌曲を他にも作曲した。アミー・ロウエルの詩による《Solitaire》とアーサー・フィックの《The Three Sisters》は、1933年1月の第1回作品展において初演された。イーディス・ソーヤーの《Small Fingers on the Silken Strings》は、翌1934年5月の第2回作品展において初演されている。

残念ながらこれらの自筆譜はすべて失われたため、《ノクターン》と《シャンティ》は、現存する数少ないピアノ伴奏歌曲である。両作品ともバリトン歌手を想定したのか、自筆譜の歌唱部分は低音部譜表で書かれているが、本録音では1オクターヴ上げた高音部譜表を用いた。

さて、《ノクターン》の詩は豊かな比喩を用いている。「いがの様に付着するランプ」や「目に見えず淡い緑の葉がしおれる」など、読者の感覚に訴えながら夜を描写してゆく。C・モトヤマによれば、それは夜の歌でありながら、怖れを表しているのではない。静けさ(1行)は鐘の音(9行)と、闇(2行)は夜明前の明るさ(最終行)と、コントラストを作りながら夜の雰囲気を伝える。

NOCTURNE

Silence.

But the dark stirs uneasily.
Like golden burrs
Lamps cling with slender bright
Barbs on the cloak of night.

Around the lamps, pale green leaves droop unseen
Blossoms throw a fine snare of fragrance on the still air,
With notes like opening flowers
Slow bells chime hour.
Presently graves will yawn
And skeletons will walk till dawn.

《空の幻想》(1933年2月、ボストン)

ソプラノ・フルート・ピアノのための『空の幻想』は、1933年2月に完成し、翌1934年5月に大澤の「第2回作品展」において初演された。ソプラノのグラディス・デ・アルメディア、フルートのジョージ・マドセン、ピアノのレイモンド・ヘンスは皆、ボストン大学音楽学部の講師達である。大澤の名は留学4年目のこの頃には、気鋭の若手作曲家としてボストン音楽界で知られるようになっており、母校のボストン大学は学校を挙げてこの才能ある留学生を支援していた。教師達が初演者となっているのは、そうした理由である。

第2回作品展は、元駐日大使のキャメロン・フォーブスが列席する正式なもので、会は成功裡に終了した。大澤はこの自信によって、世界の楽壇に通じる作曲家になりたいという大望をより現実的に捉えるようになり、パリ留学へとつながっていった。

歌詞は“さすらいの詩人”として知られるアメリカのハリー・ケンブの詩、「A Phantasy of Heaven」である。1918年に文芸誌『ザ・スマート・セット』に発表されたこの詩は、1920年台に2つの『名詩選集』に収録されており、ボストン大学図書館で大澤の目にとまったと思われる。

詩は4節から成り、亡くなった幼い男の子が天国で戯れる様子を描写している。熾天使がうたた寝をしている間に、子供が他の天使達と楽しげに遊んでいる第1節。たわわに実った葡萄が余りに美しく魅惑的なので、取って逃げてしまう第2節。葡萄の房が大きく重たすぎて、子供達がつまずき倒れる第3節。熾天使が気づいて彼等を神の前に連れて行くが、神は怒らず自分もガリラヤで悪戯をしていたことを思い出して笑う第4節。このように、詩は子と天使が喚起するファンタジーで、神の気高い本質を感じさせると同時に、子を亡くした親に慰めを与える。

大澤はクリスチャンだった母の影響で幼い頃から日曜学校に通い、讃美歌を聞いて育ち、留学直前までは日曜学校教師と学院オルガニストを務めていた。本作品は、生涯を通して宗教音楽から

離れることはなかった大澤の、ボストン時代におけるこのジャンルの作品として位置づけられ、パリでの『小ミサ曲』(1935年)へつながる。尚、「Heaven」の訳は、大澤自身が作品表において「空」としている。

A PHANTASY OF HEAVEN

Perhaps he plays with cherubs now,
Those little, golden boys of God.
Bending, with them, some silver bough,
The while a seraph, head a-nod,

Slumbers on guard; how they will run
And shout, if he should wake too soon, —
As fruit more golden than the sun
And riper than the full-grown moon,

Conglobed in clusters, weighs them down,
Like Atlas heaped with starry signs.
And, if they're tripped, heel over crown,
By hidden coils of mighty vines, —

Perhaps the seraph, swift to pounce,
Will hale them, vexed, to God — and He
Will only laugh, remembering, once
He was a boy in Galilee!

《秋の歌》(1936年4月、神戸)

管弦楽伴奏仏語歌曲『秋の歌』は、大澤が帰国して間もなくの1936年4月に神戸で作曲された。

その2ヵ月後に、既述の36年6月23日大阪朝日会館に於ける「巴里新帰朝 大澤壽人作曲指揮交響音楽会」で初演されている。この演奏会で発表する4曲の管弦楽伴奏歌曲に大澤は日本語・英語・仏語を用い、アメリカとフランスへの留学の成果披露とした。

本作品の歌詞となったのは、ポール・ヴェルレーヌの『サチュルニアン詩集』所収の「秋の歌」である。日本では上田敏による訳、「秋の日のギオロンのためいきの」の一節で有名になった詩で、大澤はヴァイオリン助奏を伴って、物憂い秋の雰囲気を醸し出すことに成功している。本作品の管弦楽版自筆譜は失われ、このピアノ伴奏版のみが現存している。

CHANSON D'AUTOMNE

Les sanglots longs

Des violons

De l'automne

Blessent mon cœur

D'une langueur

Monotone.

Tout suffocant

Et blême, quand

Sonne l'heure,

Je me souviens

Des jours anciens

Et je pleure

Et je m'en vais

Au vent mauvais

Qui m'emporte

Deçà, delà,

Pareil à la

Feuille morte.